連載 二×法楽 17

「て」違いの文法

京都教育大学助教授　森山（もりやま）　卓郎（たくろう）

ある授業で、受講しておられた日本語教育の先生からとんでもない聞きまちがいの話を聞いた。

ある中国人の友人がひどく苦しそうな顔でふらふらしているので、どうしたのかと聞いたところ、風邪で薬を飲んだのに、かえってひどくなってしまった、と言ったという。そこで、どんな薬を飲んだのか、と確かめてみると、確かに風邪の薬だったという。そこで、飲み方を尋ねてみると、なんと当人はそれを「お酒」といっしょに飲んだと言ったという。

なぜそのようなことになったのか。当人は日本語の平仮名が読めないので、読める中国人の友人に説明書きを読み上げてもらったということであった。問題はこの説明書きの解釈である。薬にあったのは、「**空腹時をさけておのみください**」という説明であった。これを、「**空腹時**（この部分はおそらく中国語の発音で読み上げたのだろう）、**オサケデ**（テとの区別は難しい）**オノミクダサイ**」と聞いて、「**空腹時、お酒でおのみください**」と解釈したのだという。気の毒なことに、彼は、いぶかしく思いながらも、それを、そのまま実行してしまったのである。読み上げてくれた人も日本語に慣れているわけではないので、「て」と「で」がまぎれてしまったらしい。風邪薬を「お酒で飲む」というのは常識的には考えられないことである。しかし、慣れない日本。そのような薬もあるのかもしれない、と考えても不思議ではない。また、日本語を母語としない人のアクセントを考えると、確かにそういうまちがいが起こるというのは想像できる。

結局、「空腹時」をねらって、風邪薬を「お酒で飲んだ」わけだから、ふらふらになって当然である。聞きまちがいはこわい。本人も大笑いをしたということであったが、まあ、大事にいたらなくて何よりだったと思う。

同じく、中国からの留学生に聞いたのだが、アルバイトの事務所で、「**また休憩中ですか／まだ休憩中ですか**」の区別ができずにどきっとしたことがあるという。「まだ休憩中ですか」だったら単に時間を聞いているだけという意味になるが、「また休憩中」だったら、いつも「休憩」していて、またまた「休憩しているのか」という非難に聞こえる。確かにどきっとするはずだ。

アクセントでも、共通語の、「また」というアクセント（「た」が高い）と関西方言の「まだ」のアクセントが同じになるので、本当にややこしくなるということであった。中国語が母語なので濁音と清音の違いよりアクセントの方が手がかりになるということもあるかもしれない。

日本語教育ではこういう濁音の発音はよく問題になる。ここで、文法の活用の学習に関連したクイズを一つ。「読んで」のように、「て」が「で」になるのはどのような場合でしょうか。少し補足をすると、「足す＋て→足して」だと「て」のままだが、「読む＋て→読んで」のように「て」が「で」になる場合がある。文法的には同じ「て」が、発音上濁音になる場合があるわけで、そのルールをさがしてごらんなさい、というクイズである。

授業で聞いてもすぐ答えられる学生はほとんどいない。答えは、「ぶ、ぐ、ぬ、む」で終わる五段活用動詞の場合。すなわち、五段活用動詞で語幹がバ行、ガ行、ナ行、マ行の場合に、「て」が濁音になるのである。例えばバ行だと、「運ぶ、選ぶ」などはいずれも「運んで、選んで」のように「で」という濁音になる。ガ行の「脱ぐ、防ぐ」なども、「脱いで、防いで」のようになるし、ナ行は「死ぬ」ぐらいしかないが、やはり「死んで」と濁音になる。「読む、噛む」などのマ行も「読んで、噛んで」となる。ついでに言えば「て」が「で」になるのと同様、「た」も「だ」となるし、「たり」なども同じく「だり」となる。

日本語を外国語として学習する人たちは、こういう規則を覚えて使えるようにならねばならない。日本語学習者にとって、文法的にも、「て」と「で」の違いは、（最近よく聞く表現で言えば）実に「悩ましい」のだ。

私事で大変恐縮だが、二十年近く前、ある歌会で詠んだ歌の「て」にコピーのよごれがあって、濁点つきの「で」のように読めたことがあった。「陶なれば乱妨悪事やりかねて遠き目をして狸は笑ふ」という歌だったが「やりかねで」になると「やりかねなくて」と意味が変わるのである。自分の腰折れなどは今では覚えていないが、「て」違い、というわけで、この歌だけはなぜか覚えている。